

〈研究ノート〉

## ディベートを行うことで得られる教育効果

— 「人間関係とコミュニケーション」におけるアーギュメンテーション教育の授業実践を通して —

岡田 圭 祐

### 要約

「人間関係とコミュニケーション」という講義科目において、アーギュメンテーション教育の視点からディベートを行った。この試みがいかなる教育的効果をもたらし、また、「人間関係とコミュニケーション」を教授する上でいかに有効であったかを、受講生全員を対象とした質問紙法による統計的調査を基に検証することを目的とした。

結果として多くの学生が、アーギュメンテーション教育が目的とする事柄について体験的に学び、理解を深めたことが調査結果から示唆された。また、アーギュメンテーション教育の目的が「人間関係とコミュニケーション」で求められる講義内容と重なる部分が多いことから、ディベートを行うことが講義を行う上でも有効であり、加えて、調査結果が示唆している通り学生が主体的、能動的に学べたことから一定の成果を上げられたことが分かった。

キーワード 人間関係とコミュニケーション、ディベート、  
アーギュメンテーション教育

### 目次

1. はじめに
2. アーギュメンテーション教育を用いた「人間関係とコミュニケーション」
3. 授業の展開
4. 質問紙調査の概要
5. 質問紙調査の結果と考察
6. 今後の課題と展望
7. おわりに

## 1. はじめに

2009年度から開始された介護福祉士養成課程における新カリキュラムは、大きく3つの領域に区分されている。そのうちの一つに「人間と社会」領域がある。この領域は、その基盤となる教養や倫理的態度の涵養に資することを目的とし、「介護」に必要な周辺知識の習得を目指すものである。こうした「人間と社会」領域の内に「人間関係とコミュニケーション」という科目がある。この科目は「介護」の基盤となる人間関係を概論的に学び、その構築に必要不可欠であるコミュニケーションについても学ぶものである。

良好な人間関係の構築を目指すにあたって、コミュニケーション能力の向上は必要不可欠なテーマである。しかしながら、これを講義で学生が理解し、実際の介護場面で活用し、展開できるようになっていくためには、あまりにも難しいテーマである。

そこで、理論と実践をつなげる教育として、アーギュメンテーション教育としてディベートを行うことにより、学生はコミュニケーション能力と技術を学ぶことができ、加えて人間関係においても体験的に学べると考えた。

本稿では質問紙調査を手掛かりに「人間関係とコミュニケーション」におけるアーギュメンテーション教育としてディベートがもたらす教育的効果と妥当性について検証し、考察を深めることとする。

## 2. アーギュメンテーション教育を用いた「人間関係とコミュニケーション」

ディベートとは公的な主題について異なる立場に分かれ議論することを言い、討論会とも呼ばれるものである。統制され、明確に立場を区別して議論することから、バズセッションやディスカッションとは明らかに異なるものである。ディベートはその目的から、大きく二つに分けることができる。一つは教育的目的で行われる教育ディベートである。様々な教育目的のために行われるもので、教育ディベートの本質的な目的にアーギュメンテーション教育がある。アーギュメンテーション教育とは、議論過程 (process of arguing) ないし議論学 (study of argumentation) を意味し、その教育には論理学と修辞学の要素を含む。このことから、教育ディベートはアーギュメンテーション教育の実践であるとも言える。アーギュメンテーション教育の副次的効果としては以下のものが挙げられ、これは人間関係構築に向けたコミュニケーションにおいても大いに役立つものである。

1. 問題意識を持つようになる。
2. 自分の意見を持つようになる。
3. 情報を選択し、整理する能力が身に付く。
4. 論理的にものを考えるようになる。
5. 相手 (他人) の立場に立って考えることができるようになる。
6. 幅の広いものの考え方、見方をするようになる。
7. 他者の発言を注意深く聞くようになる。

8. 話す能力が向上する。
9. 相手の発言にすばやく対応する能力が身に付く。
10. 主体的な行動力が身に付く。
11. 協調性を養うことができる。

二つ目としては競技ディベートが挙げられる。これは教育ディベートの延長線上にあるもので、ゲーム性を加え、説得力を競い合うものである。これは世界大会が行われるほど知られており、勝敗を決定すれば必ずとディベートは競技の性格を帯びるため、教育ディベートの多くは競技ディベートとして行われる。

一方、「人間関係とコミュニケーション」は、厚生労働省が介護実践のために必要となる人間関係の理解や、他者への情報の伝達に必要な基礎的なコミュニケーションの能力を養うこと、利用者に対するコミュニケーション、他職種協働でチームケアを進める際に必要となるコミュニケーション能力の基礎的理解を養うことを目的とし、以下に挙げる内容について到達目標に掲げ実施されるものである。

1. 自己覚知、自己理解を深める。
2. 他者理解について学ぶ。
3. 人間関係の形成のための基盤を理解する。
4. コミュニケーションを形成している構成要素を理解する。
5. 援助形成のために必要となるコミュニケーション基礎知識を習得する。

こうしたことを踏まえ「人間関係とコミュニケーション」における教育内容を具体的に教授するにあたり、コミュニケーションに必要とされる能力と技術の習得を目的とするアーギュメンテーション教育は有効であると考えられる。そこで、アーギュメンテーション教育としてディベートを行うことにより、学生はコミュニケーション能力と技術を学ぶことができ、加えて人間関係においても体験的に学べると考える。

### 3. 授業の展開

ディベートは、次のように準備され、展開される。

#### ① グループ形成

1クラスは30名弱で構成される。グループでディベートを行うとき、最適な規模は、学生の力量にも左右されるが、5～7名程度である。このなかに、議論をリードするもの、リーダーの下で積極的に準備し議論に加わるもの、異なるアイデアを出し、側面から議論を支える役割を担うもの等の役割が形成される。ディベートに至るまでの授業の参加等から、学生の力量に偏りが生じないように、リーダーになりうる学生を各グループに配置すること、そのなかで互いの相性が良く、教育が関わりなくても、互いに意見を尊重する可能性があるだろうことを意識しながら、グループを形成する。

グループによるディベート活動は、後にみるように、個人では実現できない主体的な参加や受容する力を集団力学のなかで育むことを可能にしているが、このためには、グループが

最初の段階で、互いに受容的で、協力が期待される状況である必要がある。この考えから、グループが形成される。

通常、教員がグループを決定し、学生に発表するが、事前にこれまでの学習態度、評価等から判断することを学生に伝えているため、これまでにグループ形成について、学生内部から、表だって異論が出たことはない。

## ② ディベートテーマの選定

先にアーギュメンテーションの副次的効果を列挙したが、このなかで1～4の効果は、短期大学部の教育全体で実現するもので、ディベートの活動だけで実現できるものではない。

ディベートの活動では、学生の主体的参加を実現し、協力してすることを通じて、他者の考えを受け入れることが直接的な目標となる。それは、先に挙げた副次的効果の5～11に当たるものである。このなかで、他者とその考えを受容する力や協調性は、効果の5～7と11に含められる。

5. 相手（他人）の立場に立って考えることができるようになる。
6. 幅の広いものの考え方、見方をするようになる。
7. 他者の発言を注意深く聞くようになる。
11. 協調性を養うことができる。

こうした直截な目的から、テーマの選定では学生が参加できるテーマであること、個々の議論から他者の考えを受け入れるかどうか判断が分かれるようなテーマであることが望ましいことになる。

これまで、ディベートの指導をするなかで、さまざまなテーマを学生に与えて、学生の参加を促してきた。学生の表面的な参加が容易であっても、議論の中に個々の学生が参加する必要がない、あるいはできないようなテーマは、不適切なテーマとなる。例えば「そばとうどん、どちらが好きか」というようなテーマは、学生の参加は準備の最初の段階では容易であるが、好き嫌いで見分かれてしまううえ、お互いがそれぞれの主張に終始してしまい、論点が二分化してしまうことが考えられる。この為、こうしたテーマは考えを深めるなかで、様々な意見を受け入れ、広い考え方を体得する目的にはそぐわないことが分かっている。

今回のディベートでは、第1段階のテーマとして、次の二つとした。

1. 「同性結婚を認めるべきである」
2. 「18歳からを成人とするべきである」

このテーマで、4つのグループが議論を戦わせた後、勝ち残ったチーム同士、負けたチーム同士が、第2段階の次のテーマでディベートすることになる。

3. 「安楽死は必要である」
4. 「赤ちゃんポストは必要である」

いずれもが、論点が二分化しないようなもので、どの立場からも考えが深められるであろうと考えたため、学生に与えたテーマである。ディベートのテーマを学生に考えさせることもありうるが、適切なテーマにならないことも予想されるので、教員が与えている。

## ③ ディベートの流れ

1クラスは、4つのグループに分けられる。このグループを次の図のようにディベートを戦わせる。各グループは、3つのテーマについて準備し、第1段階のディベートに勝利したグループ同士、負けたグループ同士が、それぞれ第2段階のディベートに進むことになる。こうして最終的に1位から4位まで順位が決まることになる。

1回戦
「同性結婚を認めるべきである」
Aグループ「肯定派」 V.S. Bグループ「否定派」
「18歳からを成人とするべきである」
Cグループ「肯定派」 V.S. Dグループ「否定派」
3位決定戦
「安楽死は必要である」
A・Bグループの敗者「肯定派」 V.S. C・Dグループの敗者「否定派」
決勝戦
「赤ちゃんポストは必要である」
A・Bグループの勝者「肯定派」 V.S. C・Dグループの勝者「否定派」

図 対戦表

## ④ 準備段階

質問紙調査に見られるよう、学生は積極的に参加していたことが分かる。学生の準備時間は、個人での準備と集団での準備を合わせ1.5～17 / hの範囲に広く分布している。平均で約6.5時間、1時間単位で分布をみると、最も多いのが6時間となる。尚、集団での準備では、各参加者が主体的に参加しているか、各参加者の意見がそれぞれ引き出されているのか、事前に教員が何に注目して準備活動を見守っているかを説明することなく、準備作業をしてもらっている。これについては、事後指導の中で説明していくものとした。

今年の場合、次のプロセスで準備が進められた。

- |       |                        |
|-------|------------------------|
| 7月2日  | 1. ディベートの流れの説明         |
| ↓     | 2. グループとディベートのテーマの発表   |
|       | 3. グループの準備             |
| ↓     | 4. グループと個人の準備 *準備期間1週間 |
| 7月9日  | 5. ディベート               |
| ↓     |                        |
| 7月23日 | 6. まとめ                 |
|       | 7. 解説                  |

## ⑤ ディベート本番の手順

試合 ◎試合時間は各15分とする。

肯定派側立論 2分

否定派側質疑 2分

否定派側立論	2分
肯定派側質疑	2分
準備期間	3分
否定派側反駁	2分
肯定派側反駁	2分

試合ルール ・ 試合時間厳守で行う。

- ・ 規定時間を越えた場合、立論中であっても途中で打ち切るものとする。
- ・ 試合中、私語があった場合失格とする。
- ・ 試合に際し辞書、ノート等全ての物について持込を許可する。
- ・ 試合進行等は全て司会の指示に従うものとする。
- ・ 個人に対する批判等に関しては注意があたえられ、場合によって失格とする。
- ・ 試合中、グループ全員が、一度は発言する。発言が無かった場合は減点する。

こうしてディベートが行われた後、議論に参加せず、議論を見守っていた学生が評価する。ディベートに参加した学生が顔を伏せて、聴衆役であった学生達を見ないようにして、教員の合図でいずれのチームが説得力があったかを挙手で表示する。

これまで、聴衆役の学生の挙手で、勝者チームが決まらないことはなかったが、今年は、第2段階の議論の優劣が同一票となったため、授業の科目間連携の研究のために参観していた教員が、最終判定をして優劣を決めることになった。

#### ⑥ 事後指導

事後指導において、ディベートを行った趣旨とポイントについて解説を行う。ここで初めてアーギュメンテーション教育と、コミュニケーションの関連について説明し、ディベートを行った際、教員がどこに注目していたか、その効果について話す。すると、質問紙調査からも分かる通り、多くの学生はディベートを通してこれを体験的に学んでいるため、理解を示す。しかしながら、そうではない学生がいることも想定し、或いは復習の為、ディベートでの実際を振り返りながら、ディベートとアーギュメンテーション教育の効果、アーギュメンテーション教育の効果とコミュニケーションの順に繋げながら話す。こうすることでコミュニケーションにおける技術として考えた場合、聞くということがいかに重要であるか、また、相手に伝えるということの難しさ、工夫がいかに必要かということを教授する。

#### 4. 質問紙調査の概要

2012年度の「人間関係とコミュニケーション」における全講義日程を終えた段階で、ディベートを行ったことによる教育効果とその妥当性を検証するため、受講した全学生を対象に以下のようなアンケート調査を行った。選択式の項目については統計的処理を行い、記述式のものに関してはKJ法を用いて分析を行った。

## 1) 調査対象

浦和大学短期大学部介護福祉科1年に在籍している「人間関係とコミュニケーション」(2012年)を受講した学生(54人)

## 2) 調査方法

「人間関係とコミュニケーション」の全講義日程終了後、調査対象者に質問紙を配布し、記入後回収

## 3) 調査日

2012年7月30日

## 4) 調査内容 資料1「質問用紙」

## 5. 質問紙調査の結果と考察

以下に示した質問紙調査の結果から、ディベートの準備、つまり学生が個人・グループで予習に費やした時間を合わせて平均すると、実に6時間以上にも上る。

また、教育ディベートとして勝敗を決し競技性を持たせ実施したことにより、グループとしての一体感も生まれた。学生の積極的な参加が期待され、半数は積極的に加わっていたことが表1から読み取れる。しかし「課題だからしかたなく加わった」学生も三分の一いる。さらに、なにも考えずに周囲に流されるように参加している学生も2割弱いる。「課題だからしかたなく加わった」学生が、なぜ積極的に加われなかったのかが問題となろう。議論する、話し合いをすることに意義を見いだせていないのか、グループワークに意義を見いだせていないのか、検討課題として残されている。

表1 学生の参加意識

	人数	割合
積極的に加わった	27	50%
課題だからしかたなく加わった	18	33%
なにも考えなかった	9	17%
計	54	100%

また、学生の主体的な参加意識は、参加後の充実感を大きく左右しているように判断される。表2にある通り「積極的に加わった」学生の約8割は、「とても楽しかった」と回答している。「楽しくなかった」と回答しているのは、1名だけである。

「課題だからしかたなく加わった」学生は、参加意識の消極性から言えば、参加後の満足度が低いとも予想されるが、「楽しかった」「とても楽しかった」を合わせて7割強が含まれている。しぶしぶの参加であっても、自分の気持ちを外に表す、意見を積極的に持つ姿勢は、コミュニケーションの積極性にもつながり、準備とディベートの参加で充実感を得たとも推定される。

事前に「なにも考えなかった」学生は、一番充実感が得られなかったと言える。「とても楽しかった」学生の数も少なく、「いずれでもない」「楽しかった」がそれぞれ3名ずつである。何も考えずに、グループワークに加わるということは、行為の意味や結果に関心が弱い

とも言えよう。このような学生の姿勢を変化させることも大切であろうと考える。

表2 学生の参加意識と充実感

	なにも考え なかった	課題だからしかた なく加わった	積極的に加わった	計
楽しくなかった	1	1	1	3
いずれでもない	3	4		7
楽しかった	3	6	4	13
とても楽しかった	2	7	22	31
計	9	18	27	54

積極的に加わった学生が、ディバートの結果である順位に付いて関心が強かったかと言え、そうとは言えない。表3にある通り、順位を事前に予想したかという問いに、「はい」と回答しているのは「積極的に加わった」学生の約5人に2人である。3つのグループのなかで、順位にもっとも関心が高い割合を示している。次に関心が高いのは「なにも考えなかった」学生グループで3名に1名の割合、「課題だからしかたなく加わった」学生のグループは9名に1名の割合となっている。

「課題だからしかたなく加わった」学生は、グループ間の競争という刺激に対しても、最も反応しないグループである。積極的に加わった学生とは異なる主体性をみることができる。

表3 学生の参加意識と順位の予想行為

実数			
	はい	いいえ	計
積極的に加わった	10	17	27
課題だからしかたなく加わった	2	16	18
なにも考えなかった	3	6	9
割合			
	はい	いいえ	計
積極的に加わった	19%	31%	50%
課題だからしかたなく加わった	4%	30%	33%
なにも考えなかった	6%	11%	17%

学生のディバートのための準備時間は、学生の参加意識と関係があると考えられる。表4は、参加意識と準備時間の関係を考えるために作成した表である。準備時間が回答されていない2名の学生、著しくかけ離れて多い準備時間をかけている2名の学生は、この表から除かれている。

「積極的に加わった」学生の平均準備時間は、7.7時間で、最頻値は6時間である。ただし、著しく多い準備時間の学生を含めて平均を求めると、9.9時間となる。「課題だからしかたなく加わった」学生の平均準備時間は、5.3時間で、最頻値は5時間である。「なにも考えなかった」学生の平均準備時間は、4.6時間で、最頻値は5時間である。

ここでも、「課題だからしかたなく加わった」学生が「なにも考えなかった」学生よりも、結果として積極的であることが示されている。



表4 学生の参加意識と準備時間

時間	なにも考え なかった	課題だからしかた なく加わった	積極的に加わった	総計
1.5	1			1
2		4	1	5
3	1	2	2	5
4	2	1		3
5	3	4	3	10
6	1	2	5	8
7			4	4
7.5		1		1
8	1		1	2
8.5			1	1
9			2	2
10			1	1
11		1	1	2
12			2	2
15			1	1
17		1	1	2
総計	9	16	25	50

また、学生の充実感と準備時間の関係をみると、表5のようになる。

「とても楽しかった」学生の平均準備時間は7.4時間で最頻値は6時間である。「楽しかった」学生の場合は、平均準備時間は6時間、最頻値5時間、「いずれでもない」学生の平均準備時間は3.5時間、最頻値2時間、「楽しくなかった」学生の平均準備時間は2.7時間、最頻値は2時間となっている。

参加意識の高い学生は、準備時間も多かったことから、大変であっても充実して楽しいという感想をもったと考えられる。参加意識が低くても、楽しい感想をもった学生がいるのはなぜか、おおいに注目される場所である。

参加意識が低い学生が、準備活動のなかでどのように意識を変化させていったのか、意識の変化は、今回のアンケート項目にはなかった。しかし、表6のように個人の準備時間とグループの準備時間の相関をみると、極めて弱い相関関係にあることが分かる。このことから、グループの準備活動のなかで、積極性が出てきたと考えてよいであろう。

当初予想していた通り、予習の段階から学生はディベートを通しアーギュメンテーション教育の目的を体験的に学び、「人間関係とコミュニケーション」への理解を深めることができた。しかし、予想に反する結果となったものもあった。当初、ディベートを用いた理由の一つとして、ゲーム性を持たせた学習を提供することにより、学習意欲の向上につながるという思いがあった。「難しい」と言う印象を与えることにより、考えることを止め、学習意欲の低下につながると思ったからだ。今回のアンケート調査から、多くの学生はディベートについて「難しい」という印象を持ったようだ。しかし、一方で積極的に参加できたという答えが大半を占めた。ディベートは学生にとって難しい課題となってしまった訳だが、反面、グループで一つのことを成し遂げようと、困難に立ち向かう中で生まれた、助け合い、協調

性、他者を気遣う心などが、結果として学習意欲の向上に繋がったと考える。

こうしたことからアーギュメンテーション教育として行ったディベートは、「人間関係とコミュニケーション」を教授する上で有効な手段であり、学生が主体的且つ能動的に学ぶことができ、教育効果の向上にも繋がるものである。

表5 学生の充実感と準備時間

時間	楽しくなかった	いづれでもない	楽しかった	とても楽しかった	人数
1.5		1			1
2	2	3			5
3			2	3	5
4	1	1		1	3
5		1	5	4	10
6			2	6	8
7			1	3	4
7.5				1	1
8		1		1	2
8.5				1	1
9				2	2
10				1	1
11			2		2
12				2	2
15				1	1
17				2	2
総計	3	7	12	28	50

表6 学生の個人の準備時間とグループの準備時間の相関

		個人準備時間												総計
		0	0.5	1	2	3	4	5	6	7	8	10	12	
グループ準備時間	1		1	4	2	1								8
	1.5							1						1
	2	1		3	1	6		1			1			13
	3			1	3	5	3	1	1		1			15
	3.5							1						1
	4			1	2		1	1						5
	5			1						1		1	2	5
	8					1								1
	9					1								1
総計	1	1	10	8	14	4	4	2	1	2	1	2	50	

表7 ディベートから学んだことの順位

質問事項	選択された順位					順位 得点
	1位	2位	3位	4位	5位	
自分が正しいと思う考え以外に多様な考えがあること	8	19	19	8	0	189
自分の考えを理解してもらうことの難しさ	11	12	9	19	3	171
議論のながれを予想することの難しさ	8	10	13	20	3	162
いざという時に自分が緊張したりして、言葉が出なくなる こと	0	1	2	3	48	64
相手の意見を聞くことの大切さ	27	12	10	5	0	223

表8 ディベートで勝つために大切なことの順位

質問項目	選択された順位								順位 得点
	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	
主張する考えが、正しいか、誤っているか	0	0	0	0	1	4	15	34	80
主張する考えの理由を丁寧に調べること	0	0	1	6	15	11	13	8	153
主張する考えを説明する順番など、作戦を考えること	0	1	2	6	10	23	6	6	176
良く通る声ではっきり言うなど、コミュニケーションの基本的な力	1	4	6	8	9	7	18	1	239
チームの気持ちがひとつになっていること	1	6	10	18	9	5	2	3	258
相手の意見を聞くこと	28	13	12	1	0	0	0	0	392
時間の使い方	4	11	17	12	5	4	1	0	301
伝え方の工夫	20	19	7	2	5	1	0	0	368

## 6. 今後の課題と展望

予習から授業までの間、アーギュメンテーション教育として行ったディベートは、「人間関係とコミュニケーション」を教授する上で有効な手段であり、学生が主体的且つ能動的に学ぶことができるものだということが分かった。しかしながら、復習の機会を提供することに関して大いに課題を残す結果となった。ディベートで得た知識と経験をしっかりと振り返り、自分のものにしていくための工夫が必要である。また、実際の介護場面で活用し、展開できるよう、他の授業、実習とさらに連動させた仕組み作りも、合わせて考えていく必要があると感じた。

## 7. おわりに

以上、本稿では、「人間関係とコミュニケーション」で行ったディベートを通し、同科目におけるアーギュメンテーション教育がもたらす教育的効果と、その妥当性について質問紙調査を通して検証、考察した。団塊の世代が65歳以上に達する2015年が目前にせまり、さらにその10年後、2025年には75歳以上の後期高齢者数が2,000万人を超えることが見込まれている。こうした状況で、2007年11月に「社会福祉士及び介護福祉士法等の一部を改正する法律」が成立し、同12月5日に公布された。この法律改正に伴い介護福祉士養成課程における教育カリキュラムが見直され、新しい教育カリキュラムは、2009年4月より実施されることとなった。

「人間関係とコミュニケーション」は新カリキュラムに介護福祉士養成課程の必修科目として位置づけられ、開始された科目である。故に歴史も浅く、確固たる教授法が確立されていない分野である。そのため必要とされる教育内容を、いかに学生に分かりやすく具体的に、且つ実際の介護現場で活用し、展開できるよう教授していくことができるかが課題となっている。こうした課題解決に向け、今後とも検証、考察を深めていくと同時に、継続して調査を進めることとする。

## 資料1

## ディベートに関するアンケート

このアンケートは、今年度の効果測定を目的とするものであり、成績には一切関係ないものであります。アンケートから得られた情報は、統計的に処理し、来年度以降の授業を考えるための参考にさせていただきます。

- 1 ディベートの準備にどのくらいの時間をかけましたか。  
個人で ( ) 時間程度  
グループで ( ) 時間程度
- 2 ディベートの準備は楽しかったですか。  
(とても楽しかった 楽しかった 楽しくなかった いずれでもない)
- 3 ディベートの準備は大変だったですか。  
(とても大変だった 大変だった 大変なことはなかった いずれでもない)

3-1 「とても大変だった」「大変だった」と答えた方にお伺いします。

どんなところが大変だと感じましたか。

- 4 ディベートの準備にどのように加わりましたか。  
(積極的に加わった 課題だからしかたなく加わった なにも考えなかった)
- 4-1 「積極的に加わった」と答えた方にお伺いします。なぜ積極的に加わる事ができたと思いますか。

- 5 ディベートを行う前に自分たちのグループの順位を予想しましたか。  
(はい いいえ)
- 5-1 「はい」と答えた方にお伺いします。  
ディベートを行う前に予想した順位をお答えください。  
(1位 2位 3位 4位)
- 6 ディベート後、観客席の友達が判定してくれた。集計中その判定を予測しましたか。  
(はい いいえ)
- 6-1 「はい」と答えた方にお伺いします。  
予想した勝敗と実際の勝敗は一致していましたか。  
1回戦の予想 (予想通りだった 予想したものとは違っていた)

2回戦の予想（予想通りだった 予想したものとは違っていた）

6-2 「はい」と答えた方にお伺いします。

なぜ予想どおりに、あるいは予想と違った結果になったと思いますか。

7 ディベートから学んだことはなんですか。最も学んだと思うものから順に番号を付けてください。

- 自分が正しいと思う考え以外に多様な考えがあること
- 自分の考えを理解してもらうことの難しさ
- 議論のながれを予想することの難しさ
- いざという時に自分が緊張したりして、言葉が出なくなること
- 相手の意見を聞くことの大切さ

8 ディベートで勝つために大切なことは何だと思いますか。最も大切だと思うものから順に番号を付けてください。

- 主張する考えが、正しいか、誤っているか
- 主張する考えの理由を丁寧に調べること
- 主張する考えを説明する順番など、作戦を考えること
- 良く通る声ではっきり言うなど、コミュニケーションの基本的な力
- チームの気持ちがひとつになっていること
- 相手の意見を聞くこと
- 時間の使い方
- 伝え方の工夫

9 ディベートへ積極的に参加することができましたか。

（積極的に参加できた 課題だからしかたなく加わった なにも考えなかった）

9-1 「積極的に参加できた」と答えた方にお伺いします。なぜ積極的に参加することができたと思いますか。

10 ディベートからコミュニケーションのために大切なことを学ぶことができましたか。

（沢山学んだ 少し学んだ 全く学ぶことがなかった わからない）

11 ディベートからチームで仕事をするために大切なことを学ぶことができましたか。

（沢山学んだ 少し学んだ 全く学ぶことがなかった わからない）

12 その他、ご意見があればお書きください。

#### 引用・参考文献

- [1] M.アーガイル著、M.ヘンダーソン著、吉森護編訳、『人間関係のルールとスキル』、北大路書房、1992年
- [2] 川本信幹・藤森裕治、『教室ディベートハンドブック』、東京法令出版、1993年、12頁～13頁
- [3] 松本茂、『頭を鍛えるディベート入門』、講談社、1996年
- [4] 深田博己、『コミュニケーション心理学—心理学的コミュニケーション—』、北大路書房、2001年
- [5] 茂木秀昭、『ザ・ディベート：自己責任時代の思考・表現技術』、筑摩書房、2001年
- [6] 武長脩行、『ディベート訓練のすすめ—みんなでディベろう！（シリーズ「21世紀の生きる力を考える」）』、今人舎、2002年
- [7] 星野欣生、『人間関係づくりトレーニング』、金子書房、2004年
- [8] 蟹池陽一他、『現代ディベート通論復刻版』、ディベート・フォーラム出版会、2005年
- [9] 茂木秀昭、『ディベートが面白いほどできる本』、中経出版、2006年
- [10] 西部直樹、『はじめてのディベート 聴く・話す・考える力を身につける—しくみから試合の模擬練習まで（スーパー・ラーニング）』、あさ出版、2009年

## Summary

Known Debate by the Resulting Educational Effectiveness  
— I Can Put It in “Human Relations and Communication”  
through Class Practice of the Argumentation Education —

Yoshihiro Okada

Performed debate from a viewpoint of the Argumentation education in a lecture called “Human relations and Communication”.

This trial brings any educational effect, and it was intended to inspect it based on the statistical survey by the questionnaire method for all the students in teaching “Human relations and Communication” how it was effective.

As a result, many students learned for experiencing it about the matter that Argumentation education is aimed for, and findings suggested that a student deepened understanding. In addition, because there are many parts overlapping with the contents which a purpose of the Argumentation education is demanded from by “Human relations and Communication” Debate is effective in teaching it. A student was independent and active hat it was achieved constant result by having been able to learn actively suggested it.

**Keywords** Human Relations and Communication, Debate,  
Argumentation Education

(2012年11月15日 受領)